

値があるのである、詳言すれば前の時間に其の子供がどういふ精神状態にあつてどういふ成績を得たか、次の時間には何か身體の工合でも悪かつた爲め、眞面目さ加減は同じであつたけれども、前の成績程に至らなかつたのであるといふような事を、教師たるものは見てやらねばならぬ、又或生徒になると加減が悪いばかりでなしに、何かの調子で前より後の方が良く出来るのが普通であるのに、後の方が悪く出来、又其次に行くに襟付などが立派に出来たなどと云ふ例がある、全體としての成績を検査することも勿論必要であるが、更にあの兒童生徒の此部分は、斯ういふ精神状態にあつたから、斯様な結果を得たのである、あの時には、斯ういふ風であつたから、かういふものが出来た、此所は、こうだ、彼所は、こうだ、と云ふ風に一人一人微に入り細に入り、叮嚀親切に、その内生活にまで立入つてこれを指導する處に、初めて教師としての偉大さと尊さがあるのである。

斯うして出来上つた成績こそ精神的努力の結晶であつて、教科としての裁縫の眞價は實にこゝにあるのである。

自分はこの道程即ち生徒の態度動作等を、作業振りと稱してゐるが、この作業振りは結果として現れた裁縫の出来栄え以上に、少くともそれと同等の重大さがあるのである、故に教師は此の作業振りをも採點する旨を生徒に言ひ渡して、各個の作業振りを一々明細に採點簿に記載し、之を成績考査の折に重大視することは、學校の教科として缺くべからざる事であると思ふ。

### 第十節 成績調査

成績調査の要點は前述の諸要項を總括して、

第一、に作業精神緊張の程度

第二、に裁ち方積み方の正否

第三、に標附方縫ひ方の巧拙

第四、に所要時間の多少

第五、に寸法の正否

第六、に材料の難易

第七、に工夫及び應用の有無

第八、に裁ち方縫ひ方等の理論に關する筆答試験、宿題等の成績

以上の諸要項に分ち、實習並びに理論につき精細に調査せねばならぬ、而して實習に對しては七の割に、理論に對しては三の割位に、定めて全體を評價するのが適當である。

### 第十一節 裁縫筆記錄

自分は裁縫筆記錄を調製して之を生徒各自に持たしめ、成績品の出來上る都度其の各自の筆記錄をも添へて出させ點檢して夫々成績調査濟

みを現はして返附する。其の方法は裁縫の時間の終り二分間程に全級の兒童生徒に命じて、其時間中實習せる事柄を成績表の受業中記事の欄に書かせるのである。

別表に示す、

かくの如くにして書かせた受業中の記事によつて、教師は考査の際各自の其時々の努力さ加減を、一目瞭然と知る事が出来る。又時間の多少も判然とわかる。又仕立上寸法の欄には、各自の家庭より夫々寸法が示されてあるため、これも實物と對照すれば直ちに正否がわかる。其下部に備考欄を設けたのは、教師が考査の際其の寸法書の不調をしらぶるに、年齢と瘠せ形と肥満にて丈低しとかいふ事を特に明瞭にするためである。又兒童生徒にあつても、その寸法と凡その體格との釣合を知るの手段にも供せらる。かくして自評の欄の書き方に就いては初年級



計ることに努めなければならぬ。

頭腦に理解して、之が直ちに眼と手とに實現出來得た時ほど、快感を覺えることは他にないものである。

又教師は其時間、其日の仕事の分量と、出來榮へこを、充分商量して、兒童生徒に分量を豫告し、兒童生徒をして時間と競争させて一生懸命にやらせる。かくすれば大抵のものは其日の豫定まで出來上る。そして出來上つた時の快感が次第に裁縫に對する興味となつて、泉の如くわき立つものである。萬一其日の豫定が残つた場合には、其ものは放課後なり、家庭なりで假りに其残つた分を十五分間なり、二十分間なり補ひをつけ、次に他の兒童生徒と一緒に所より始めるといふようにさせる。かくすれば兒童生徒は己れの技術に對して、あまりに悲觀せずに進めるのである。又教師はかゝる機會をはずさず、今日の其兒童生徒の努力をたゞ、へ次の

獎勵とすべきである。かくの如くしていづれにも興味をもたらしめて行く時は、成績は全體揃つてよくなる事が出来る。

又教師は公平無私なる講評をして、習つた事柄を確實に領得せしめ、且つ次回の獎勵に充て、又其校の規定に隨つて評語若しくは評點を附す。

檢印は教師の責任を明かにするため、亦保護者も同様其の子供の成績を眞に視て學校と家庭と一緒になつて、其子供を教育するために必要である。

而して裁縫筆記錄には、初めに一年間の教授細目を示し、兒童生徒をして豫め材料の準備に便にす。(細目白紙欄には自分の學校の細目を記入する)。

次に和洋服一切の標準寸法表を揚げ参考に供した。

又次には曲尺、鯨尺をメートルに換算する對照表を記して換算に便に

した。

次には前に述べた成績表を揚げ教師児童生徒及び父兄の便覽に供へ、終りの餘白欄及び方眼紙には裁ち方積り方縫ひ方等教授の要項を記載して置くのである。

## 第十四章 裁縫科と訓練及び家庭との聯絡

### 第一節 訓練の本務

教育の事業は之を養護、教授、訓練の三つの方面に分つ事が出来る。養護は主に身體の保存發育に任じ、教授は知能の領得に任ずる。而して訓練は慾望を指導し情操を高め意志を陶冶し道德の發達を促進し、更に社會團體の一員としての責務を知らしむるの任に當るのであつて、教育の最も重大な方面である。

抑々教育は學校のみの事業であるといふ考へは甚だしい謬見であつて、學校は主として知能の啓發即ち教授の任に當り、訓練の如きは家庭に於て大いにこれに力を致さねば其の効果を擧げることには出来ない。前に述べた如く訓練は人の内生活に影響する頗る重大なものであつて、幼少の時に之に力を致さねば遂に終生矯める事の出来ない性情を形づくらしめて了ふ事になる。人の幼少時は恰も柔かい粘土の様なものであつて、之に影響感化を與ふるものは、父母、教師、朋友、境遇等何れも重大な責任があるのであつて、就中父母と教師は、これに影響感化を及ぼす、ここが多たで、即ち訓練の任に當る直接責任者である。

かくの如く訓練は種々な方面から働きかける作用であるから、その統一が最も大切な事になる。

教授にも教案、教程等があつて、其の統一が重んぜられるが、訓練にあつ

てはこの事は更に一層肝要なことである。一切の訓練が同一の規準より互に相助けて作用すべきであつて衝突等があつては、その効果を殺ぐこと著しい。

一人の偉人に凡てを全く任せ切つて了へば、訓練も矛盾なしに行はれるが、然しこれは出来もせず望むべき事でもない。要は父母、教師、朋友、境遇等が協力して矛盾なしに訓練をせねばならぬ。これは非常に難事業ではあるが、若し少しの矛盾、些の衝突があつても、それ丈訓練の効果は減殺される事に深く留意すべきである。

前に述べた様に、訓練の固有の場所は家庭である。次にこれに任ずるものは學校である。又朋友である。然しこれ等にも増して、著しい力を持つてゐるものは社會——廣く云へば境遇である。父母、教師は深くこの點に留意して訓練の統一に破綻なき様努めねばならぬ。

訓練の方法は年齢に應じて加減しなくてはならぬ。初めは消極的に——さういふ事をしてはいけない。あゝいふ事をしてはならぬ——いはゞ悪い芽を摘むことに心懸け、兒童の性能が次第に發達するに伴つて追々積極的に——こうしなさい、あゝしなさい——いはゞ善い芽を育てる様に訓練するのが大切である。

而して相當の年齢に達し善惡正邪の判断が誤らなくなつたならば、次第に訓練の手を控えて獨立自由の道を歩ませねばならぬ。何となれば長い間左右から引廻されて育つた者は遂に自己を指導する力を失ふものである。乍然獨立自由の道を歩ませるとはいへ、判断の是非を疑ひ進退の道に迷ふ時は、父母、教師等は飽く迄良き相談相手たらねばならぬは勿論である。

教授に際しては教授者と被教育者との間に教材が存してゐるが、訓練

に於ては直接に人格的影響が作用するのである。其影響は先づ最初に父母と子供との間に成立する父母は天然の教育者である。子供が父母に従順であるのは、父母に對する敬愛から或は義務感情から來るものであつて、此の場合の訓練は最も大事である。父母に次いで教師が人格的に兒童生徒に影響を與へる。この場合には子供は教師の人格以外に非人格の權威に對して換言すれば學校の規則に對して服従する。

而してその服従は最初は強迫的であるが後には自らこれに服従する様になる。この任意の服従に至つて初めて道德的の價値が生じ、訓練の効果が現れたと云へるのである。訓練は従順の外に快活、忠實、正直、克己等を養護すべきである。殊に虚偽に對しては嚴しくこれを戒めねばならぬ。

教育は全體としての人間性の發達をはかるのであるから、意志のみ心

情のみを變化して事足れりとするべきではない、訓練も亦然りて人間性の凡ゆる方面から作用せねばならぬ。

而して訓練は教授より以上に忍耐を要する。急進、過激にこれを行ふも効果はない。訓練は太陽の如くならねばならぬ。成長するもの、周圍には常に光温を與へ時には風雨を、又稀には雷をも與へて人間性の完全な發達を期さねばならぬ。

## 第二節 裁縫科と訓練

前節に述べた如く訓練は教育上重大な一面を分擔し、教師も父母と共にその責任を分つべきものであつて、一日もこれを忽にする事は出來ないのであるが、學校といふもの、性質上その教科は大半知的の教授に傾き、動々もするにこの重大な訓練を忘れ勝ちになる。而して此の弊を救ひ得るものは、實に裁縫科であるに信ずる。修身科は勿論訓練の任に當

るもので、何れの學校も皆この科を第一位に掲げてゐるが、現状は修身科と雖も尙知的の教授に傾き易く、一場の講話に終始し易い。實際に手を取り足を支へて兒童生徒の一舉手一投足、心の動き個性の發露の微細な點迄も觀察して、眞によき訓練を待し得るものは裁縫科である。殊にその實習の時にある。裁縫の教師は學校に於ける訓練の如何は、獨り裁縫教師の指導如何による。迄の責任感を以てこれに當る丈の覺悟がなくてはならぬ。この覺悟がなくて單に綿入なり單衣物なりを縫はせてやりさへすればいゝ、といふ様な考を持つてゐる人は、如何程技術に堪能でも裁縫教師の資格は全然ないものと云ふべきである。

次に最も大切な實習の際の注意を一言すれば、實習の際は教師は机間を巡視し、個人的に又一般的に批判訂正をなすべきことを述べたが、此の際兒童生徒の誤謬が兒童生徒に原因するか、教師に原因するかを考へ

て、相當の處置を取らねばならぬ。殊に幾分にてても後者である時は教師は自己の誤りは誤りとして、無邪氣に正直に心持ちよく兒童生徒の前に訂正しなくてはならない。かゝる場合教師の糊塗的行爲は罪の上に罪の上塗をする事になつて訓練上非常な悪影響を及ぼすものである。又兒童生徒の個性の發露は――實習に於て最も顯著なものであるから此の間によくこれを觀察し、それ〴〵適當の指導をしなくてはならない。又兒童生徒の觀察の精粗、記憶の如何、注意の如何、清潔整頓、節約利用の實行如何も、此の間に觀察し監督しなくてはならない。従つて前に述べた種々の良習慣の養成も、教師の此の邊の指導監督に俟つ事が非常に大きい。而して此の良習慣の養成には、最初の出發が非常に大切である。即ち女學校に於ては――入學當初、小學校に於ては尋常四學年であるが、小學校は女學校より更に大切である。如何様にも殆ど教師の意のまゝに形づく



られ易い時は最初である。而して最初につけられた習慣は容易にぬけ難い。斯く裁縫科に於ける机間巡視は非常に多忙で且つ大きな任務遂行の極めて重要な時である。決して教師の居眠りの時ではない。更に最も注意を要する清潔整頓について詳言すれば、手先、指先、頭髮、衣服を清潔にし、用具、机、腰掛、抽斗等の清潔整頓につとめ、糸屑、布屑、針の始末等をよくする事は、一般に清潔整頓の習慣を養ひ、殊に糸屑、布屑、針の始末は、兼ねて節約利用の習慣を養ふ事が出来る。一方裁縫の實習は児童生徒にとつても多忙な時間で、動々もすれば前後もなく熱中し易く、且つ糸屑、布屑等によつて、不潔不整頓になり易い。又たこひ目に見えた所の清潔整頓は出来ても、見えない所には様々の物が不潔不整頓に隠される傾があるから、常に充分の注意を拂はねばならない。

又實習に當つて、時間と努力との節約利用に意を用ひる時は、自然仕事

に全力を集注すべき必要を生じ、従つて沈黙の裡に事をなす必要も起つて来る。こゝに初めて充實した活動が行はれるのである。動々もすれば裁縫は手と目の活動が主であつて、耳や口には閑暇であるため談話が始つて時として主客顛倒、手の活きが留守になる事がある。これは技術の上ばかりでなく、訓練上の害が甚だしい。又時間と努力を節約しようと思へば勢ひ仕事に秩序が必要になる。此の秩序ある仕事をなさしむるには、勿論教師の指導も必要であるが、児童生徒をして自ら工夫せしむる事も徳育上、智育上の効果が著しい。斯様な方面に注意が屆き、監督のよろしきを得れば、一事に全力を集注する習慣が養はれ、且つ秩序立つた仕事をする習慣も養はれ訓練の實も擧るのである。

### 第三節 家庭との聯絡

教育は學校のみの仕事でないことは前節に述べたが、本科に於ては特

に學校と家庭との聯絡が必要である。然るに父兄は兒童生徒に對して又教師に對して、誤つた見解を抱くことがあつて、其爲に裁縫科の發達を妨ぐる事が屢々ある。即ち父兄は教師を裁縫の専門家と思つて一切をこれに任せ、或はその反對に教師の悪口をなして、兒童生徒の知識を迷はせ、又或は自家の實用のみを思ふて、不適當な材料を供給し、或は徒らに裁縫の種類が多きを望む等の事もあるが、此の如きことは家庭に於て戒むべきことである。殊に古來より裁縫には幾多の流派があつて、往々學校の裁縫と家庭の裁縫とが一致しない事がある。學校でも勿論家庭の考をも容れねばならぬが、兒童生徒は多數であるから、各自家庭の流儀が違ふのは止むを得ない。故に學校に於ては、及ぶ限り種々の流派を考慮斟酌研究して成る可く総合的の教授を施すのであるから、家庭に於ける兒童生徒の裁縫は、成る可く學校の方法に據らしむる様にせねばならぬ。家庭

に於て學校の裁縫の批難をなすが如きは、兒童生徒の知識の混亂を來すのみならず、德育上悪影響を及ぼすことを忘れてはならぬ。又教育は基礎を確立して應用に進んで行く仕事であつて、徒に多きを望むは失敗の原因である。教師は父兄の誤つた見解に媚びて、教育の本領を没することがあつてはならぬ。されば、父兄の意見を全く顧慮しないのも教育の効果を擧げる方法でない。教師は平素注意して父兄の見解に誤れる者あらば之を訂正して學校の主義方針に一致させる様に努力せねばならぬ。

## 第十五章 裁縫科教師の資格

從來小學校及び高等女學校の裁縫にありては、和服のみで洋服の仕立方を課する處は極く稀であつた。然し時代の進運につれて洋服も漸次普及さるゝであらうから、裁縫の教師なるものは、洋服の仕立をも修養して

置くことが必要である。又教科の増加に伴つて裁縫教授の時間は法令上段々制限されて來る傾向がある。教授の内容が増加してこれに反對に授業時間は減るのであるから、教師は要を摘み急所を外さず少時間に多大の効果を収める様工夫研究せねばならぬ。要するに裁縫科は技藝教育であるから理論のみで其効果を擧げることは絶対に不可能である。故に教授の任に當る者は技術に堪能で迅速巧妙に示範を下し得なければならぬ。フロシヤの文部大臣の教育訓令によると手工の教師は熟練された手と鋭敏な目を有つて居らなければならぬ。専門的の技術を備へて居らなければならぬ。又四拾人以上を一度に教へて行くだけの教授力がなくてはならぬ。而してエネルギーがなくてはならぬ。如何程技術に堪能な人でもそれを人に傳へるだけの精力を持たない人は手藝の教師になれぬのである。教師は人一倍の親切心がなければならぬ。廣い愛を有つて居る

人でなければならぬ。といふのであるが、日本には斯様なことは訓令として出ては居らぬが、以上のことは裁縫教師たるもの、缺くべからざる條件である。先づ教師は前述の如く勝れた手を持つてゐねばならぬ。これは勿論、廣い平等な愛を持つて居らなければならぬ。出来る子供は可愛く出来ない子供は可愛くないのは、世の人情ではあるが、出来ないからこそ尙一層教育の必要があるのである。「我は罪人をこそ最も愛すれ」と云つた古の聖人の言は、取つて以て教育者の玉條とせねばならぬのである。成績劣等な兒童に對して常に不機嫌な顔をしてゐたなら、其顔を見た兒童は心から其教師を嫌ひ惹いてはその教科を嫌ふ様になるのは當然の結果で、教師たるもの、深く戒めねばならぬ點である。生徒の不成績は一に教師の責任として平等不偏な愛を修養せねばならぬ。

裁縫科の教師たるには技術理論教授法の三調子が揃はねばならぬこ

こは、以上屢々繰り返して述べた所で明かであるが、こゝには更に教調に就て一言しよう。

教調とは教師の人格と生徒の人格とが接觸して起る一つの調子を云ふのである。如何に技術に堪能で理論に精通してゐても、よき教調を有しなかつたならば、よき教授者たり得ても、よき教育者たり得ないのである。教育の力と云ふものは主としてこの教調の如何に存する。同一の生徒が或る教師に不従順で他の教師に親愛なる如き、又或る教師は威猛高になつて生徒に命令するも、生徒は馬耳東風に聞き流すに、他の教師は殆ど無言の裡に生徒の信頼を荷ふが如き、皆教調の如何によるのである。即ち教師の人格の如何に存する、教調は實に抵抗す可らざる教育の力である。

教調は要するに教師の人格の閃きであるから、よき教調を得んには人

としての倦むなき修養が必要であるが、又教師の有する外觀も侮る可らざるものである。左に先づその外觀について述べれば。

1. 身體は大に過ぎず小に失せず中庸を得たのが望ましい、而して常に健康美を備へ舉動は鈍重であつても輕薄であつてもならぬ。
  2. 服装は簡單にして高尚なるがよく、華美に流るゝは最も悪い。
  3. 次に精練された耳と目を有すべきである。
  4. 言語は簡潔を尊び、音聲は品あつて力あり、美しく曲折自在でなければならぬ。而して時には兒童を壓するだけの重々しい聲を必要とする。
- これらは生れながらにして備はるものありて、今更望み得ない條件もあるが、大半は要するに人格の發露の一部に過ぎない、服装言語動作皆然りである。

次に精神的の條件を述べよう。

1. 自信ある調子 確實なる知識を有し堪能なる技術を持つて、常に研究に怠らなければ自然に得らるゝのである。
2. 教へる事を喜ぶ調子 學科に對する深甚な興味と快活な精神とより得らるゝ。
3. 力ある折合のよき調子 細心にして大膽なる精神の力を要す。
4. 温情に満ちたる調子 兒童生徒の心情を深く理解してその幸福を己れの幸福とする最高の道德愛によつて初めて達し得るものである。

## 第十六章 裁縫教授法の諸説並びに技術の諸流に對する教師の定見及び統一

學校に裁縫科を置かれぬ以前は、裁縫は家庭、或は仕立屋、お針の師匠等によつて教へられ、各自隨意の材料にて各個各別の教授であつたが、仙臺

の松操學校長朴澤三代治氏が初めて一學級に一定の材料を用ひ一齊の教授を實施して以來、熊本の尙綱學校も朴澤氏の教授法を用ゐたのである。一齊教授の形式は此時分より芽出したのである。

明治三十二年に今村順子先生が始めて教授法の書を著して、一齊教授を主張し、現今に至るまで教授者間に参考として用ゐられてゐる。一時此の法盛んに宣傳せられたる結果、教授者は多く掛圖標本萬能の一齊教授の形式にのみ捉へられ、只教壇に叫び兒童生徒と應答するのみにて、技藝教授の要素たる示範教授を没却する弊害を生むに至つた時代もあつた。然し現今は示範教授の必要缺く可からざることを悟つて、一齊教授に依る個人教授、分團教授を行ふように進化したのである。

近來は裁縫の進化に伴ひ教授法も漸次進歩し、幾多の諸氏に依て教授法の著書が現はれ、教授上の参考に資せられてゐるから、教授者は廣く諸

説を閲讀し自己の體驗と對照して研究を進むべきである。然し現今教授者間に唱道せらるゝ幾多の諸説を執つて假りに分類を試みれば四大別となるようである。

一、裁縫を理論から導いで技術に及ばんとするもの、即ち理屈が判れば技術は自然に進むこの説。

二、實地より理屈を發見させようとする説、即ち技術に重きを置くもの。

三、教授者は理論に通じ教授の方法さへ巧みなれば兒童生徒の成績を擧げ得るといふ説、即ち示範に重きを置かざるもの。

四、教授者自身が技術に上達し居らなければ如何に理論を巧みに稱へても兒童生徒の技術が進歩せぬといふ説、即ち實地に重きを置くもの。

然し以上諸説は孰れも偏重を免れぬと思はる。何んとなれば技藝教授は示範を骨子とし理論と教授の巧妙さに頼つて要領を得、初めて目的を

達し得らるゝもので、理論と實地と教授の精巧とは輕重あるものではない。故に教授者たるものは、此の三拍子を調へることに努力し、時代に流行する幾多の諸説に迷はぬだけの見識を有つべきである。

裁縫の技術は、各地に傳統的流派が傳はり多種多様である。近來亦色々の新案が現出し、或は某流、或は某式、と種々宣傳に努むるものがあるが爲め、生徒又は父兄等より何流がよいかなど、質問を受けることも往々あるが、各流派共裁縫の根本に觸れては變りはない、只部分的の局所に於て各流派によつて多少の異なる處あるに過ぎぬ、故に決して大問題とするに足らないから、學校の裁縫教授の任に當るものは、廣く各流派を研究し自己の體驗と比較考究して、これが是非を拾捨し以て裁縫の進歩を計るべきである。要するに女子教育の教科中重大なる位置にある裁縫科を擔當する吾人は、常に裁縫の通則を基礎として研究し、確乎たる定見と雅量

を以て雑多なる流派を調査し、長を採り短を補ひこれを統一し、女子をして惑はしめず——優良なる第二國民の母を養成せんとする覺悟がなくてはならぬ。

前述の通りで流派の雑多なることは一般の裁縫としては問題ではないが、學校の教科としては流派を統一する必要があると思ふ、何となれば學ぶ者が教師が換はり或は學校が換る場合に流派が異なれば、領得する知識技能が多くは斷片的に流れ肝要なる基本的知識技能の累加を妨げ、教授年月の経過せる割合に基礎が鞏固にならない——のみならず、一校内の教師に流派の異なるもの幾人が居る時は自然混雜に陥り易く隨て進捗を害するようになる、又一方には流派の關係より教師間に確執を生ずる恐れなしとも限らない、故に他の教科の如く國定或は指定教科書を作り、裁縫科の統一を計るようになるならば、教ゆる者も學ぶ者も時間と學

力の經濟となり、其の進捗と効果との上に多大の利益あることは想像に難くはない、小學校は已に大正五年度より文部省編纂の教科書に依つて統一されたのであるから、中等學校も指定教科書を得れば統一することが出來ようと思ふ、今日は最早區々たる流派などにて互に争ふ時代ではない、宜しく研究範圍を擴め公平なる批判を以て各流派の長短を拾捨し、その統一を計るべき時と考へる、敢て教育者の一考を望む所以である。

## 第十七章 裁縫科の設備

### 第一節 教室

裁縫教室は普通教室と同じく教授、管理、衛生に適する如く設計すべきである。

#### 一 面積

普通教室は児童生徒四十人を收容するに、三間半に四間若しくは四間に四間位であるが、裁縫教室は五間半に六間若しくは六間に七間位の廣さを要する、何となれば普通の机よりは盤面の廣さ裁縫用の机を排列するの、裁縫用具、材料などを入れる戸棚類を配置する爲め、又教師が机間巡視する時、生徒がかさ張る材料などを持つて出入する時には机と机との間の廣さを要するからである。

整理室、綿入室は教室に隣接して設計するを便利とする、其の面積は二間に三間位を適當とする。

## 二 構造

普通教室と同様に机腰掛式とする方が教授、管理、衛生等の各方面から云ふても便利である、床板には「リノリウム」を敷くがよろしい、是れは衛生上からも亦針など細かな物品の仕末の上から見ても都合がよい。

疊敷式は家庭生活の聯絡上からはよいように思はれるが、衛生上からも管理上からも不便である、若し疊敷式の既設教室なれば止むを得ず、初學年の児童に對しては臨時に普通教室を利用し、其の机に大幅布帛を載せ得る大きさの机蓋を作り使用するがよろしい、是れは管理上衛生上を顧慮するからである。

## 三 採光

裁縫教室は此科の特質として光線の工合を最もよく顧慮せねばならぬ、即ち室内の明るさを平等にする爲め、左右後の三方より採光する如く窓の装置を要する。若し設計の都合上三方より光線を採用することが出来なければ、屋上方面より光線を入れる、よう工夫すべきである、薄暗き室は絶対によくない。

## 四 温度



裁縫教室内の温度は四季共に適度を欲する、冬季は嚴寒の爲め手が凍えて運針を困難ならしめ、夏季は手に汗を發し材料品を汚すことあるからである。

### 五 換氣法

裁縫教室は烙鏝を使用するを以て常に火氣の強き火鉢を置くから、室内の空氣が不潔になり勝ちである、故に換氣法の裝置に注意しなくてはならぬ、室内空氣の不良なるは兒童生徒の氣分を鈍ぶらし作業の進捗に影響すること大である。

### 第二節 教具

裁縫に要する器具は其種類が頗る多いが、左に之れを列舉しその製作法の大要をも記してみよう。

#### 一 黑板

裁縫教授用の黑板は第十二章第二節に述べた通り二間以上のものを要するのである。

#### 二 掛圖かけ

掛圖かけは澤山掛け得るよう黑板の幅以上に長きものを作り、黑板の上端の位置に天井より釣り自在に上下し得る如く裝置すべきである、又卷圖類を黑板の上に擴げることもあるから、鋏にて留める圖留板(長さ二米突巾十一、二種位の薄き板を横に黑板の上端に掛け得る様其板の裏に折釘様のものにて鈎手を付けたるもの)二個程備へ置く必要がある。

#### 三 机

##### A、兒童生徒用

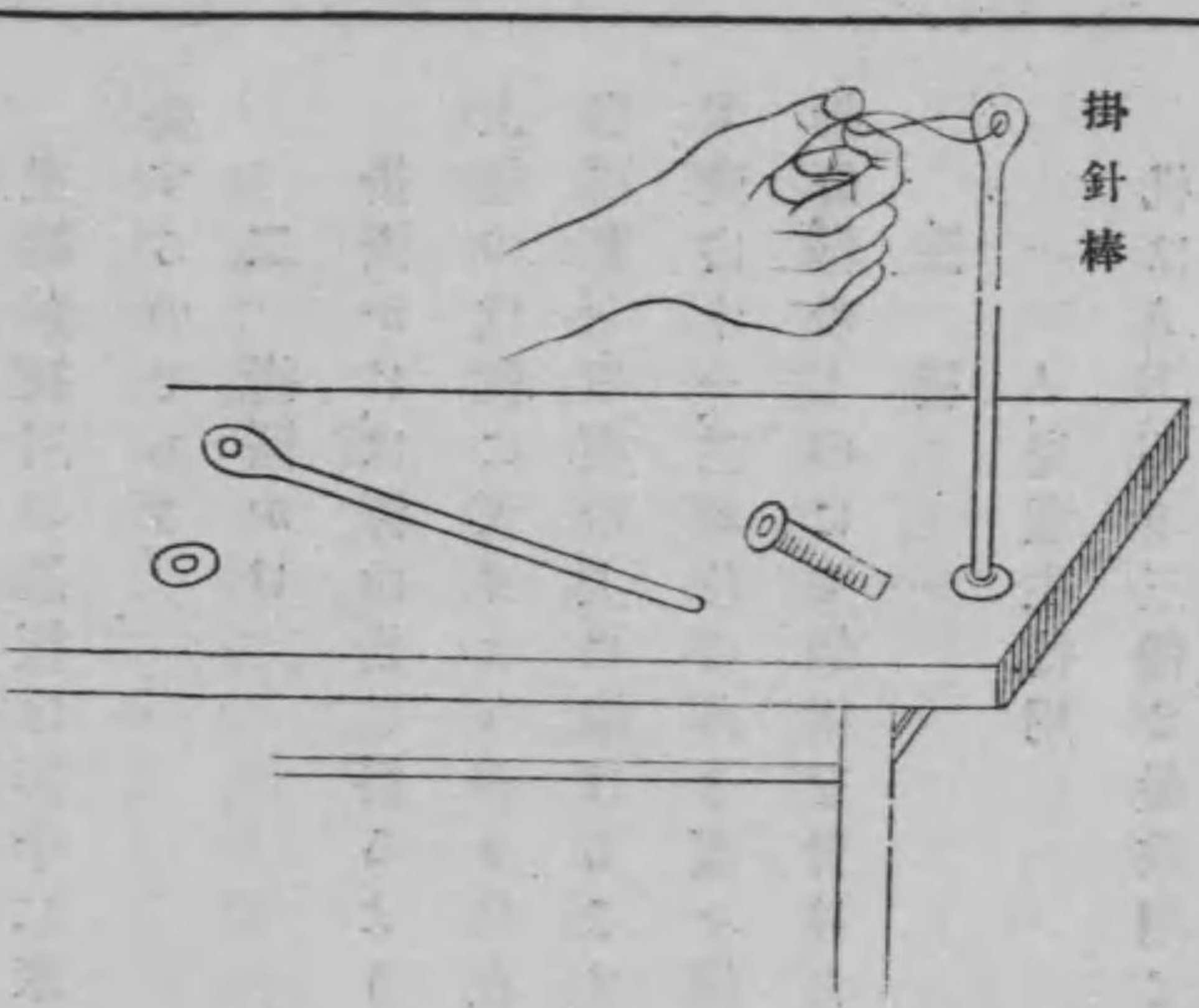
机はA、B、Cの三種を疊敷用とに分けらる、凡て裁縫用の机は籠臺兼用であるから、其盤面とする木質は密にして餘り堅くないものを選ばなく

てはならない、即ち朴柳桂の類がよろしい。

其の構造は二人用とし抽出の代りに机面の下十八糎位の處に机幅の半分の棚を造り其の棚は前後に遊動し得る様にする。

各種機の寸法は大要次の如くである

A形	高	七十糎	長	百六十七糎
	幅	七十五糎	厚	三糎乃至四糎
B形	高	六十五糎	長	百六十七糎
	幅	七十五糎	厚	三糎乃至四糎



C形

高 六十糎 長 百六十七糎  
 幅 七十五糎(五十糎小形モノ必要) 厚 三糎乃至四糎  
 疊敷式用

高(小二十糎大)二十三糎長幅厚ハ前ニ同ジ

C形同小形は尋常小學校用にA形B形は高等小學校並に中等學校程度用に適する幅廣き机は標附け方裁ち方等の際一机に二人向ひ合ひて使用するに都合がよい又机の右端にて手前から十糎位入つた所と中央にて手前から十糎程入つた所に小孔を穿ち掛け針を挿入する装置を設くるを便利とする。

B、兒童生徒用綿入臺

綿入臺は兒童生徒用机と同形とし綿作りの際必要に應じ机面を擴張

する爲め机の四方に二十五糎幅の板を取付け其装置は袖附ミシンに同じ常には板を垂れ置き使用の際は必要の方面より板を起して机面を擴げるここの出来る装置にする而して机の前後に取附ける板は中央部に切斷し左右別々に起伏し得る如くすれば使用上最も便利である此の臺は綿入室に十臺程を備附けるがよい綿入室なき學校は裁縫教室に少くも二臺は備へねばならぬ。

## C. 教師用

教卓は扇面形にするがよい扇面形なれば周圍に兒童生徒を集めて示範をなすに都合がよい又左右二段に抽出をつけ中央抽出の下二十五糎幅の棚を設ける且つ卓の上面は前方に對し斜面に出来るやう装置するが便利である。

高、七十糎

長 百八十糎

幅、七十五糎

厚

四糎

## D. 烙鏡ためし帳面臺

烙鏡ためし帳面臺は烙鏡の焼け工合を驗めす紙をこぢつけて置く。

高、三十糎長、三十糎幅、二十糎位とし面に紙をこぢる紐通し穴を二個右端より二糎程奥に穿ち置くがよい。

## 四 腰 掛

## A. 兒童生徒用腰掛

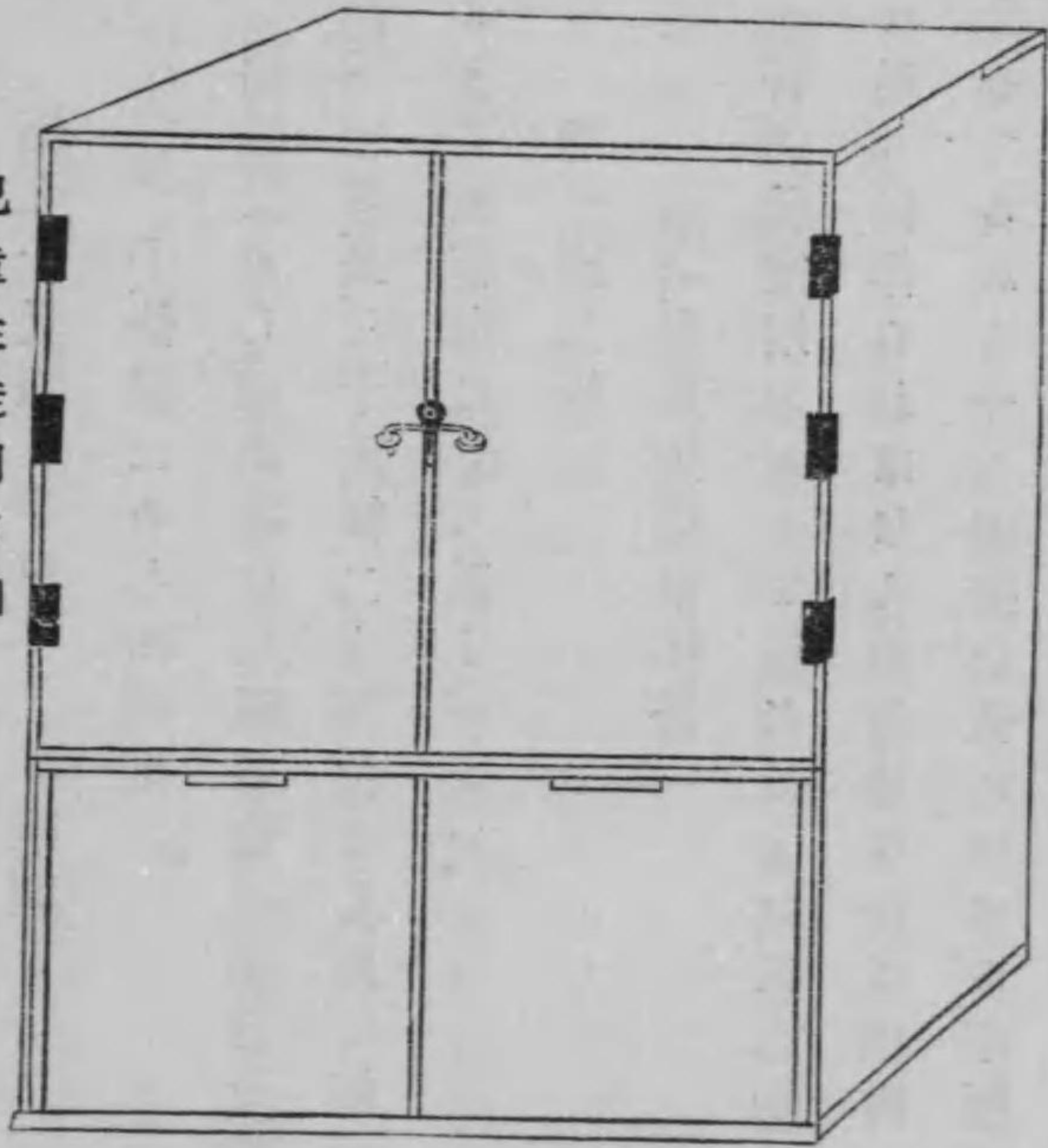
普通教室用のものと同じでよい、二人掛けのものは其長さ机の下に入れ得る様作らねばならぬ何となれば標附の時など机の兩側に立つて作業をするから一々腰掛を他にのける不便のないようするからである。

## B. ミシン用椅子

ミシン用椅子は兒童生徒の身長に應じ高低を自由に出来る装置をな

したる直径二十五極位の丸き回轉椅子がよろしい。

C、教師用椅子



児童生徒用戸棚

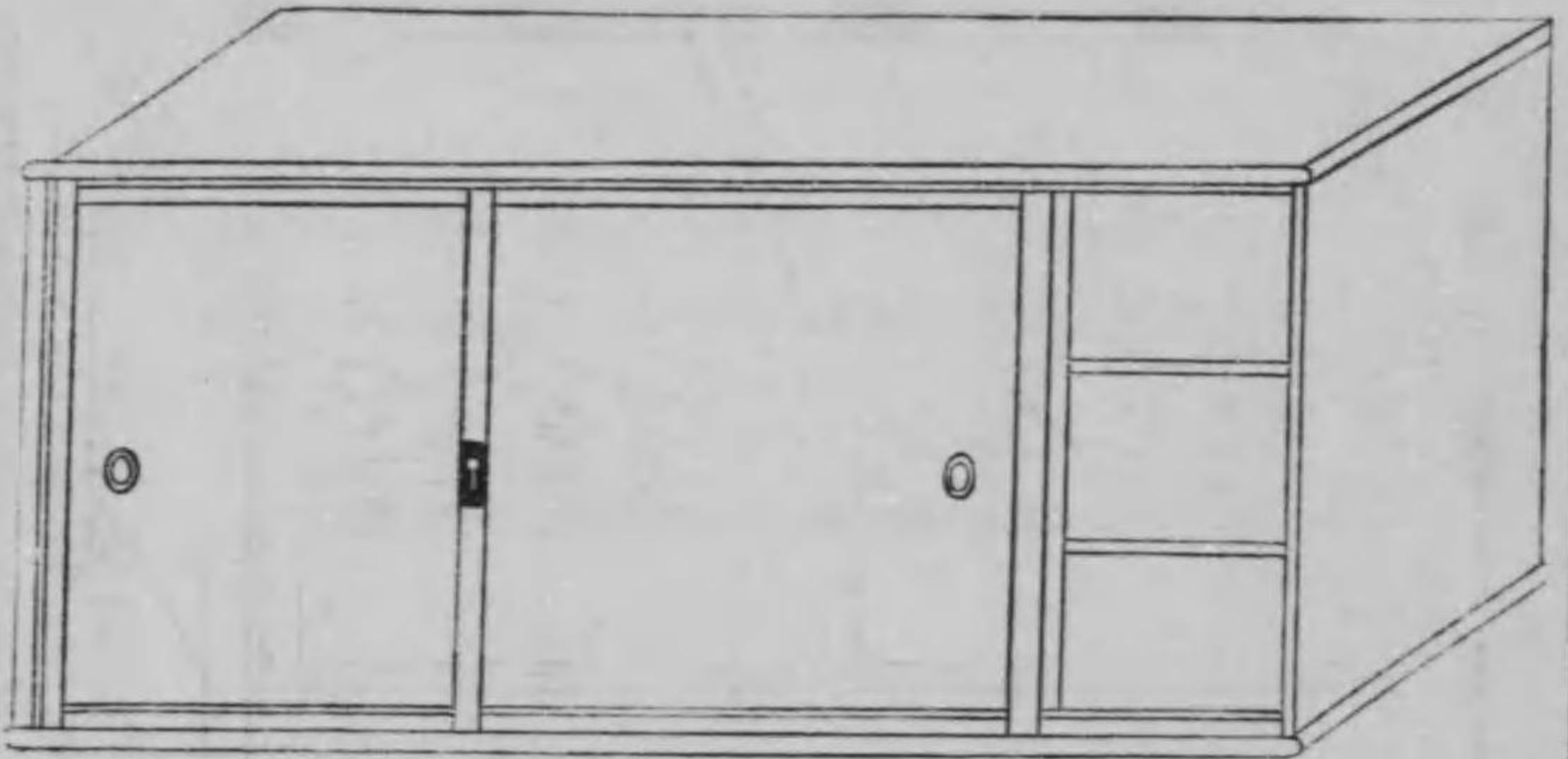
教師用椅子は教師が教壇に在つて示範をなす際に、左右に向きかへる必要があるから寄掛り附回轉椅子が最も適當である。

五 戸 棚

A、児童生徒用

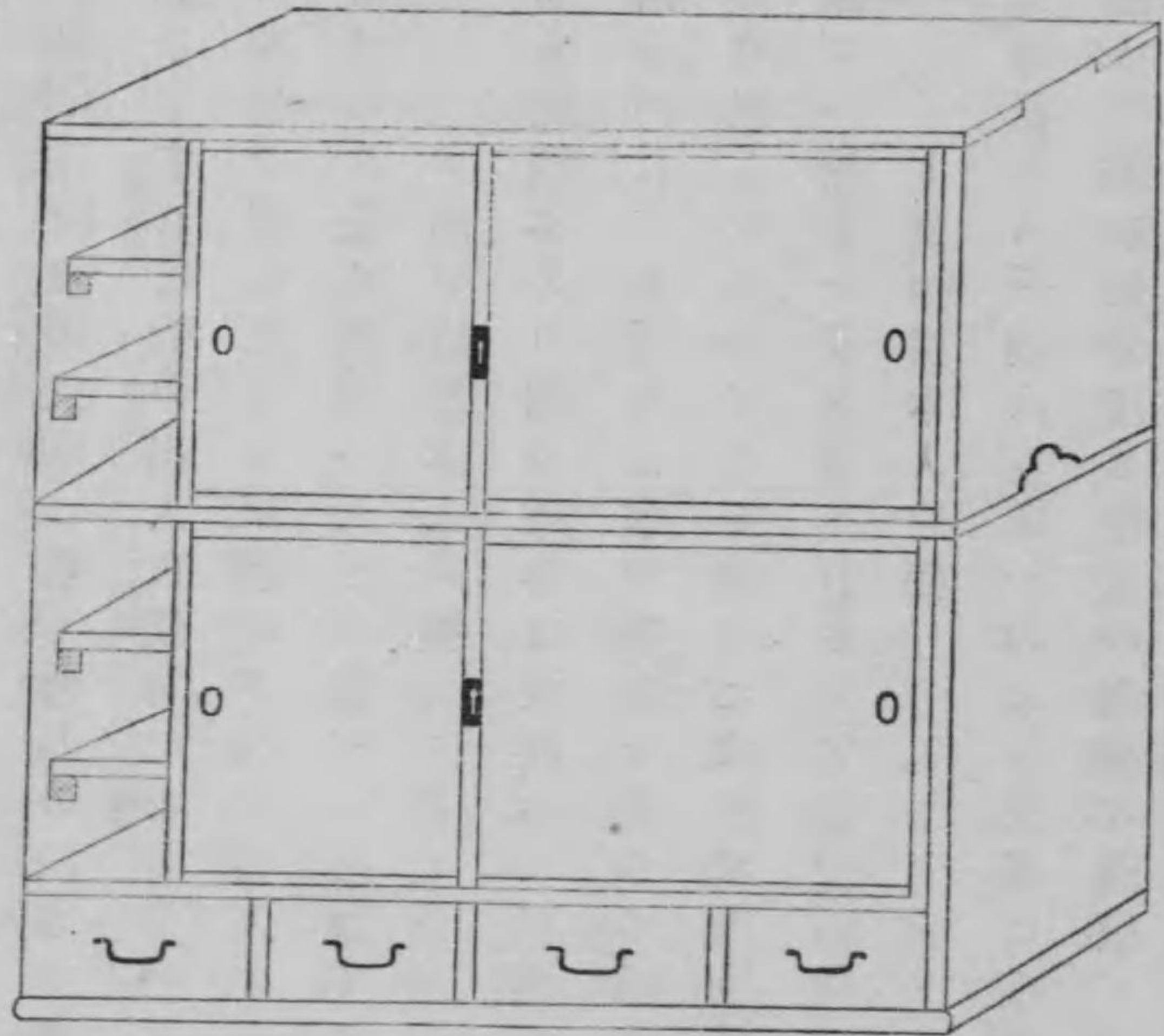
児童生徒用戸棚は上下の二段とし上段は開き戸下段は箝め戸とする尙ほ上段の

生徒用戸棚



中には三段か四段の取り外しの出来る棚を下段には一段の棚を作る、上段には裁縫物を入れ下段には針箱のみを入れる。  
高、百六十極 幅、百三十五極 奥行、六十極 上段、百極  
此の戸棚は一學級に一個宛備へねばならぬ。  
B、生徒用戸棚  
生徒用戸棚は其の上面を仕上げ臺兼用とするから他の面は塗りを施すも此の面丈けは塗つてはならない、内部の中央を縦にしきり兩方共三段位に棚を附け、其一段を一人で使用せしむる。

教師用戸棚

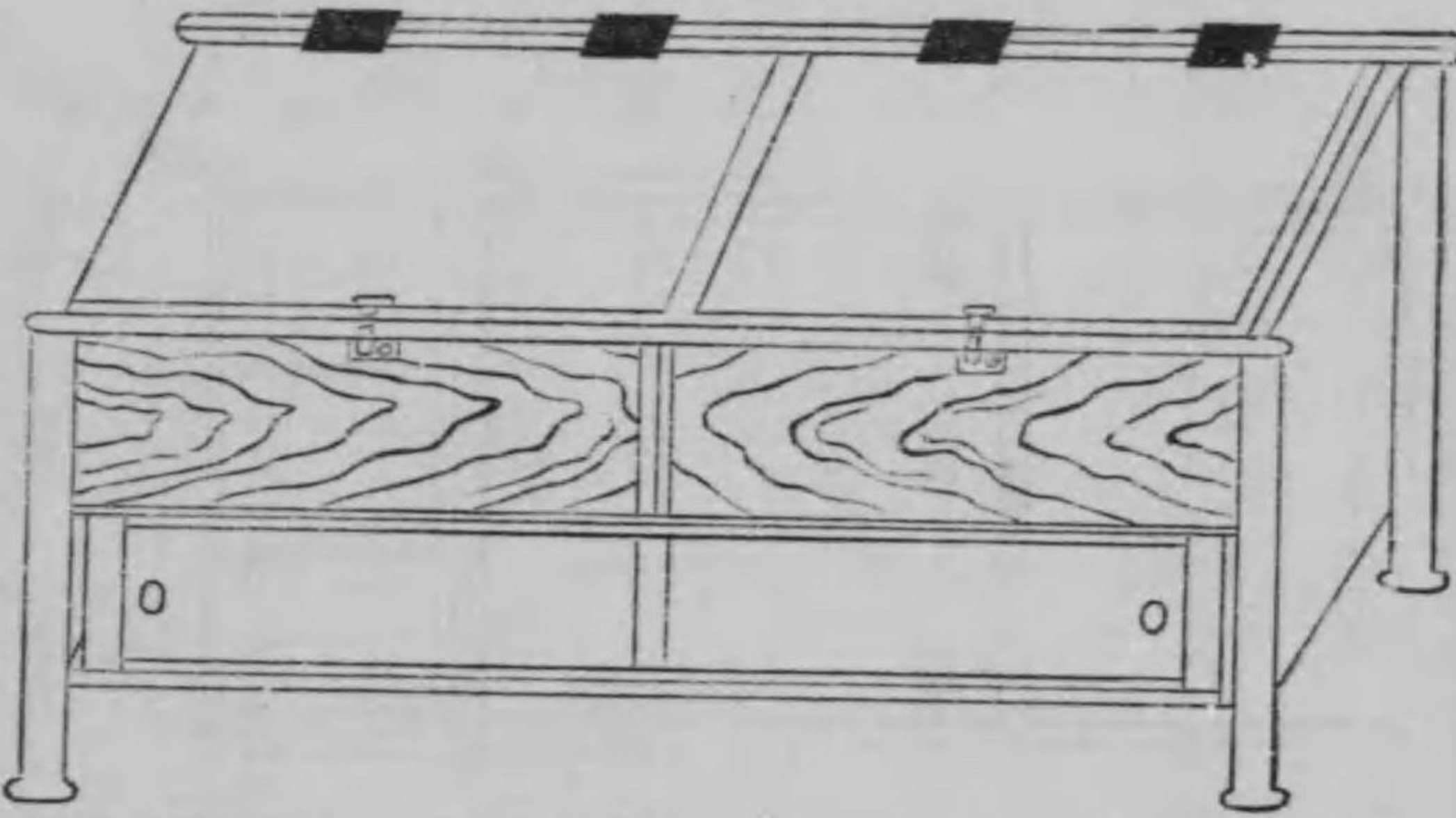


此の視戸棚は一學年毎に一個宛を備へる。

D、教師用戸棚成績品入)

教師用戸棚は重ね戸棚となし上は高、八十糎 下は高、九十五糎 其他の寸法は上下共同じく幅、百七十五糎 奥行六十糎となし下には高、十五糎の抽出四個を附ける、内部には

視戸棚



高、七十五糎 幅、百七十五糎 奥行、六十糎

此の戸棚は一教室の周圍に十個位づゝ備へる

C、標本陳列用視戸棚

視戸棚は裁縫教授の過去、現在、未來の三種材料に關する標本を陳列して兒童生徒の觀察に便する爲めに備へるのである。

構造 後高、七十五糎 前高、六十糎 幅、百七十五糎 奥行、六十糎

上面は前傾斜硝子の開戸となし觀覽に便にする内部は中段頃よりしきりて下部に三十五糎高さの押入を作る、押入の前戸は二枚引

上下共に二段或は三段に取り外しの出来る棚を僅かの前傾斜に装置する。そうすれば物の出入に便利である。前戸は板の二枚引戸とする又下部に抽出を附したるは戸棚の下方に侵入する塵埃を防ぐ爲めにもなるからである。是は教師一人に一個づつを要する。

E. 部分縫標本入戸棚

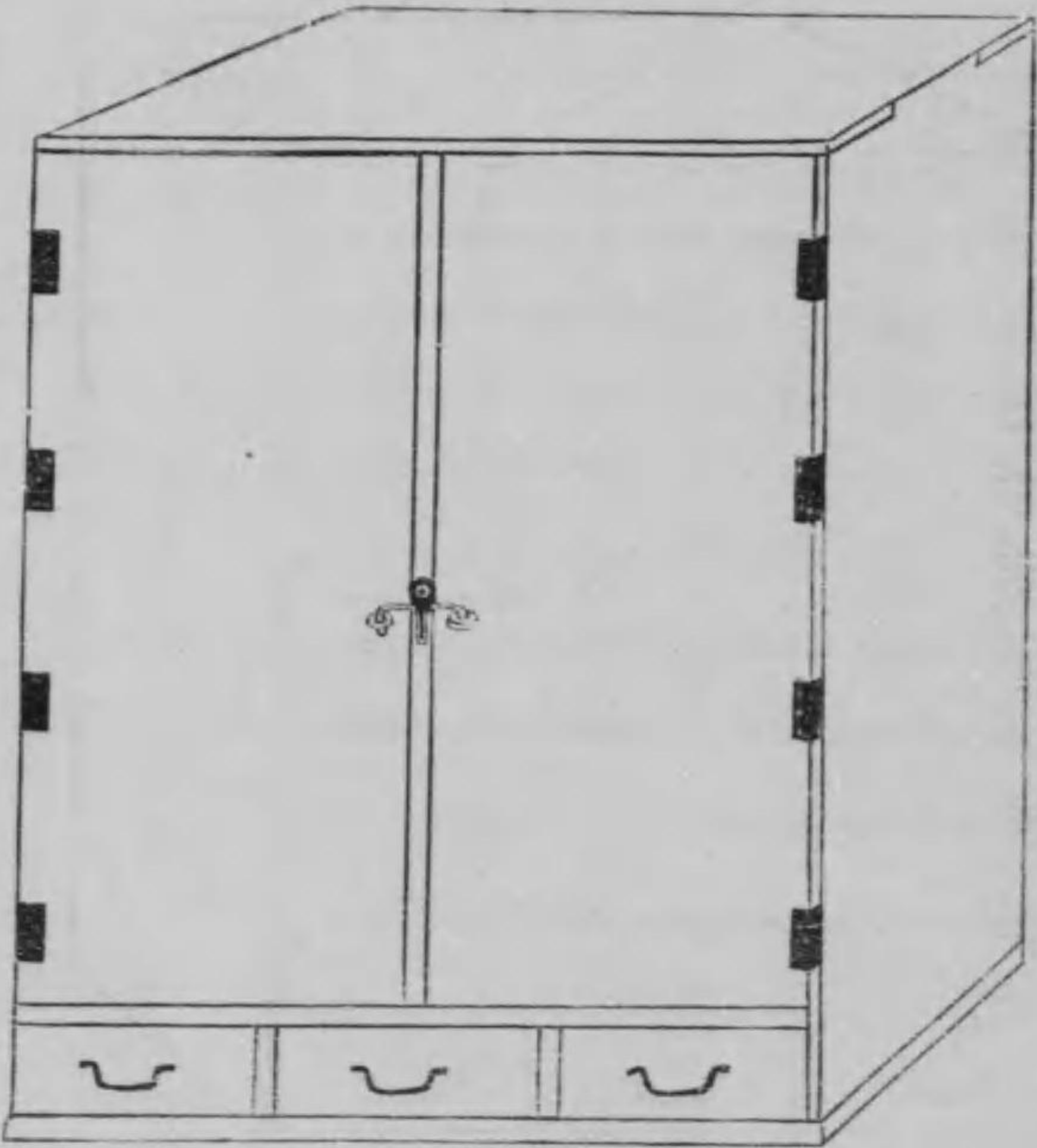
部分縫標本入戸棚の構造は成績品入戸棚と殆んど同じくし前後両面を硝子戸にする。是れは學年學期を追つて標本を列べ前後より觀覽するの便に供したるのである。抽出には針絲織物、染色等の標本を入れる。此の戸棚は一校に一個を備へれば足るのである。

F. 實物標本入戸棚

實物標本入戸棚は左圖(一)のよう下部に抽出を附け硝子の開戸とする。内部は(二)圖の如く抜き挿しの出来る棚板を装置し標本を板と共に出し

入れする。而して棚板は上部ほど漸次に板幅を狭くする。

(一) 棚戸入本標物實



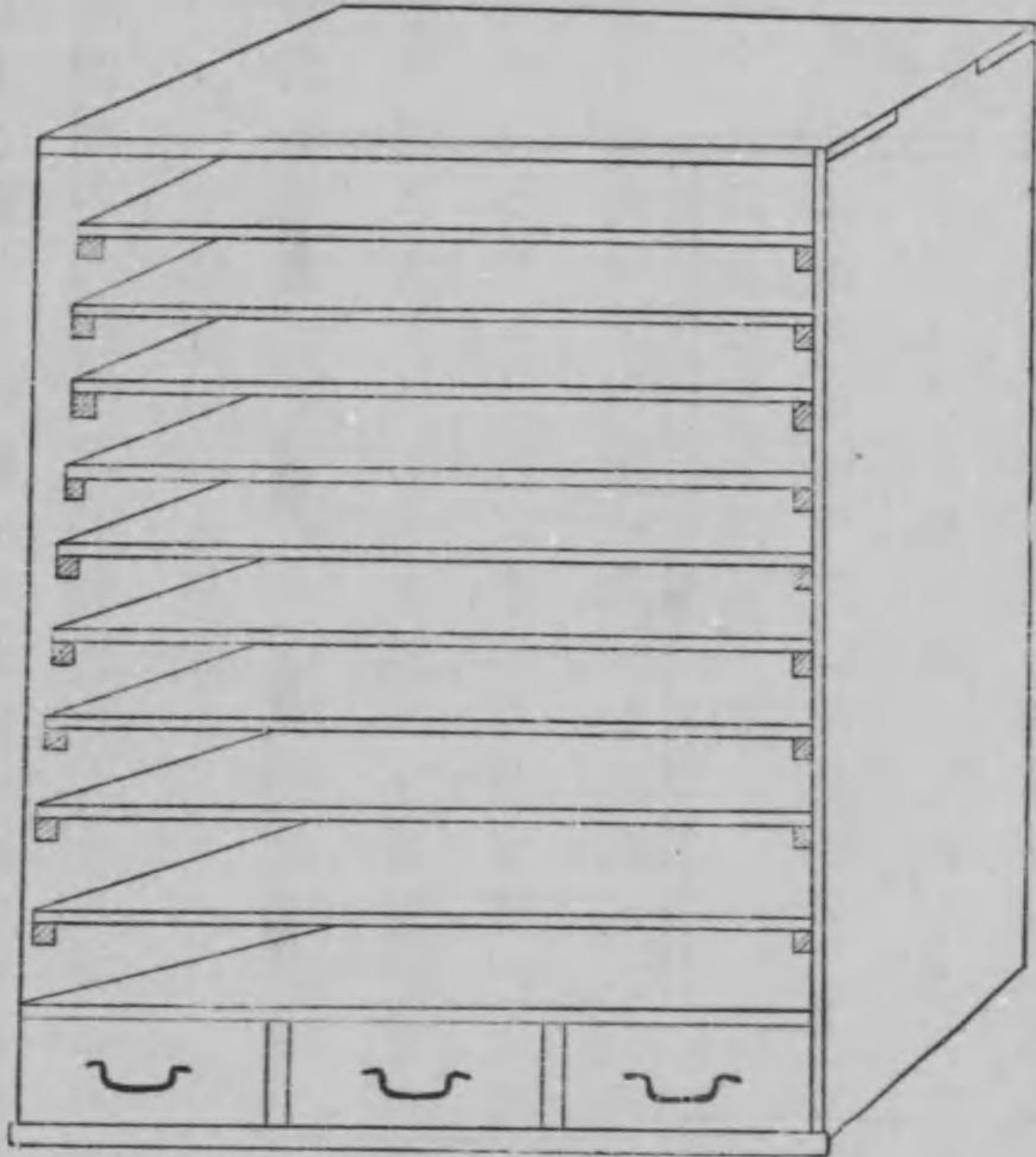
作る唯内部には棚を設けず天井裏に折釘を出し洋服掛けに掛けた洋服

高百六十五糎 幅百二十糎 奥行五十糎 抽出の深十五糎  
此の戸棚も一校に一個とし學年に應じ細目順に標本を列べる。抽出には用具の標本を入れる。

G. 洋服標本入戸棚

此戸棚は前の實物標本入れの戸棚と全然同一に

(二) 棚戸入本標物實



を釣るす様に装置する、又下方には洋服を人形に着せて飾る、附屬品其他は抽出に入れる。

此の戸棚も一校に一個でよろしい。

H、掛圖入戸棚

構造、高、百六十五糎

幅、百二十糎、奥行、百十糎

抽出の深、十五糎

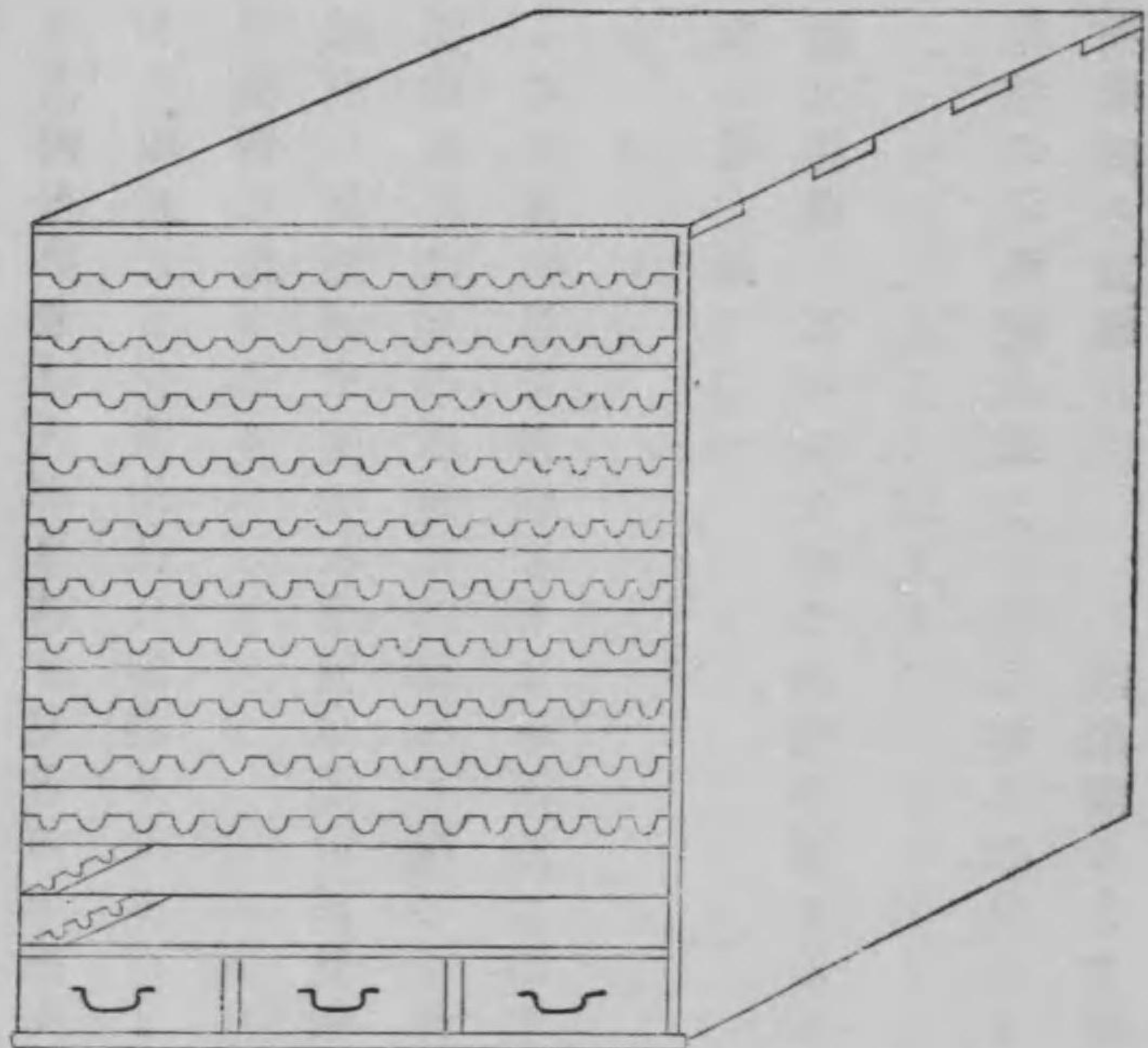
内部の棚上方十段、距

離十二糎、下方二段、距離

十糎、前戸は板の開戸と

する。

掛圖入戸棚



下の二段には掛圖軸を横に入れ上の十段には掛圖軸を縦に入る様に装置する、そうして一つの棚に軸十五本を列べる、此の戸棚も一校一個にて足る。

以上の外に陳列戸棚を作るがよい、それには季節に應じ實物

標本を衣紋掛け或は人形に被せ夏着の一揃へとか冬着の一揃へとかいふやうに陳列して、兒童生徒に觀察させるがよい、それには四方硝子戸にすれば觀覽に便である。

又教室には烙鏝、火熨斗、板蒲團などの道具類を入れる戸棚を備へ附ける必要がある以上の戸棚はいづれも檜にて作るが最上なれども、經費を減ずるには樅、杉等にて作るもよい而して白木よりは塗つた方がよろしい。

### 六 掛 圖

掛圖は和服に屬するものと洋服に屬するものとの二様になつてゐる即ち

和洋の各種縫方圖

和洋の出來上り名稱圖

和服裁ち方圖

洋服裁ち合せ圖

### 和洋服標附け方圖

洋服割出方圖

等である、是れ等の圖は兒童生徒の觀念をよく得させるには實物大なればよいが、取扱の上には大き過ぎて不便なものもあるから、適當な大きさに縮圖するがよい、而して、いづれも各部の寸法を實物に比例して作成し正確にせねばならぬ。

### 七 標 本

標本の種類は各學校で定められた、細目によつて作るべきであるが、和洋服の實物、各種縫ひ方、和洋各種部分縫、普通の服地、染色布、糸、針等で是れ等の標本は模範として各々兒童生徒に貸與するものであるから、正確巧妙に作るべきことはいふまでもない、微細の點まで明瞭に領得出来るよう作るべきである。

服地、染色布等に關する教授は衣服に就ての衛生、經濟等の知識を與へ



るのが主であるけれども、美的情懐の養成をも顧慮し柄合、色取等も成る可く美術的に選びたるものを標本とすべきである。その服地染色の標本製作方は一つ一つ臺紙に標本の一端を貼り附けて作るがよい、児童生徒に示すにも亦分類比較するにも非常に便利である。

### 八 火鉢

裁縫用火鉢は火力を強くするから、特に防火の用心をなさねばならぬ、即ち火鉢の側面及び底には煉瓦を以て被ふがよい、尙ほ火被には鐵板製のものと金網ををかけねばならぬ、又烙鏝を焼く爲めに橋のような五徳を用へる。而して火鉢の大きさは六十五糎四方とするが適當である之を教室に二個備へるがよい。

### 九 火箸、炭取、十能

火箸は火鉢一個に必ず一揃つゝ備へ、炭取、十能は一教室に一個宛備ふ

べきである。

### 十 衣紋掛

衣紋掛は木製金屬製何れでもよいが、其丈は百八十糎迄に伸び得る伸縮自在になる装置を要する、衿も同様伸縮し縮めたる時は普通肩幅六十五糎位にする。

### 十一 子供洋服人形

人形は二三歳位から大人迄十種位は備へる必要がある。

### 十二 帽子掛

帽子掛も一枚に十個位は備へるがよい。

### 十三 壓板

壓板は衣服の壓にするもの故成る可く重量あるものがよい、樺、檜、櫻等の木質緻密なものが適するであらう。

其寸法は長九十糎 幅六十糎 厚四糎半位、一校に四五枚は備ふるがよい。又萬力を備ふるもよし。

十四 火熨斗

火熨斗は其面の滑かな重量九百三十八瓦位のものがよい、火熨斗臺は焦げるのを防ぐ爲め石綿を貼たものがよい、一教室に少くとも五個位は備へる必要がある。

十五 電氣鍍

電氣鍍は火熨斗よりも使用上の効力が多い、火熨斗の様に絹布類とか木綿に限るこいふようのこなく綿布にかけても絹布にかけても支障なく頗る便利である、其重量も種々あるが一千八百瓦乃至二千七百瓦位が適當であるこれも臺を要すること前と同様である。

十六 烙 鍍

烙鍍には唐烙鍍、笹烙鍍、丸烙鍍、立烙鍍などの種類がある、唐烙鍍、立烙鍍は洋服の仕上げに使ふによい、笹烙鍍は和洋いづれに用ひてもよい、丸烙鍍は接ぎ物の時などに使用するによい。何れも一教室に十挺位は備へて置く必要がある。

十七 蒲 團

蒲團には火熨斗用蒲團と烙鍍用蒲團と二種ある、火熨斗用蒲團は毛布を二枚折として綴ぢ之れを白キヤラコで包む、これは平らになつてゐて都合がよい、烙鍍を使用する時は板蒲團が極めてよろしい、板蒲團は長七十五糎、幅四十五糎、厚一糎位の板或はボール紙に木綿綿を二枚程を入れ、白キヤラコを上貼つて作る。火熨斗用蒲團も板蒲團も一教室に五枚づゝ位を備へるがよい。

十八 洋服仕上げ用道具一切

洋服裁縫の仕上げを良くするには、腕木や丸蒲團や其他の道具が入用である。一校に五組も備へて置くがよい。

十九 足袋木型仕上げ道具一切

足袋を仕立てるには是非無くてはならぬ、一校に五組位は備へて置く必要がある。

二十 裁ち板裁ち庖丁

これも一校に五組位は備へて置く必要がある。

二十一 定規

定規も丁字形、三角形、真直定規等一校に各々五個位は備へ置くべきである。

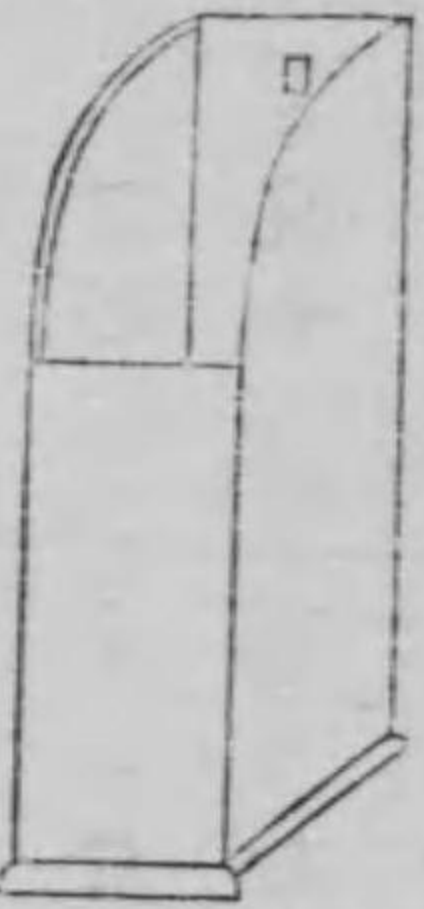
二十二 尺度

半米突尺度は児童生徒が各々所持するけれども一米突尺は一裁縫室

に児童生徒数の半數位は用意し置く必要がある尙ほ五十糎尺も教師一人に一本づゝ備へなければならぬ。

尺度入箱

二十三 尺度入箱



尺度入箱は圖の如く高七十糎の十六糎立方の箱とし前方の一面の高さを四十八糎とする。

各教室に必ず一個を備へる。

二十四 綿のばし

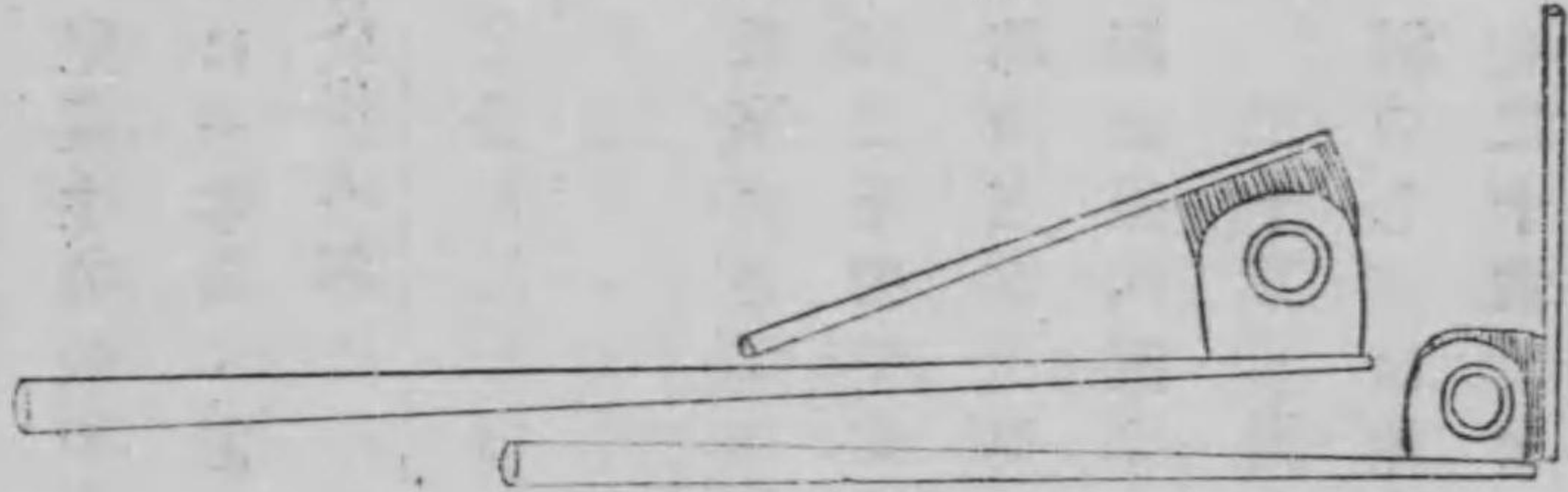
綿のばしは真綿を使用する度に必ず入用であるから裁縫室には必ず一個は備へ置くがよい。

二十五 湯のし釜

湯のし釜は地直しに必要故一校に少くも一個は備へたし。

二十六 金盥

霧吹



金盥は地直の時又は手を洗ふに必要故一裁縫室に一個は備へたし。

二十七 水差

水差一個は裁縫室に必ず備へ置き授業中に水不足ぬ様用意し置かねばならぬ。

二十八 霧吹

霧吹は實用新案折疊式霧吹器が使用保存共に便利であつて價も廉なるを以て児童生徒各自に所持せしむるがよい、學校にてはアルミニウム製又は瀬戸引のコツプ一教室に五個位を用意し置けばよい、スフレ一附霧吹は價高き割に破損し易く児童生徒の使用には適しない。

二十九 時計

時計は作業に對する時間の分量を児童生徒に知らしむる必要あるから裁縫室毎に一個づゝ備ふべきである。

三十 ミシン

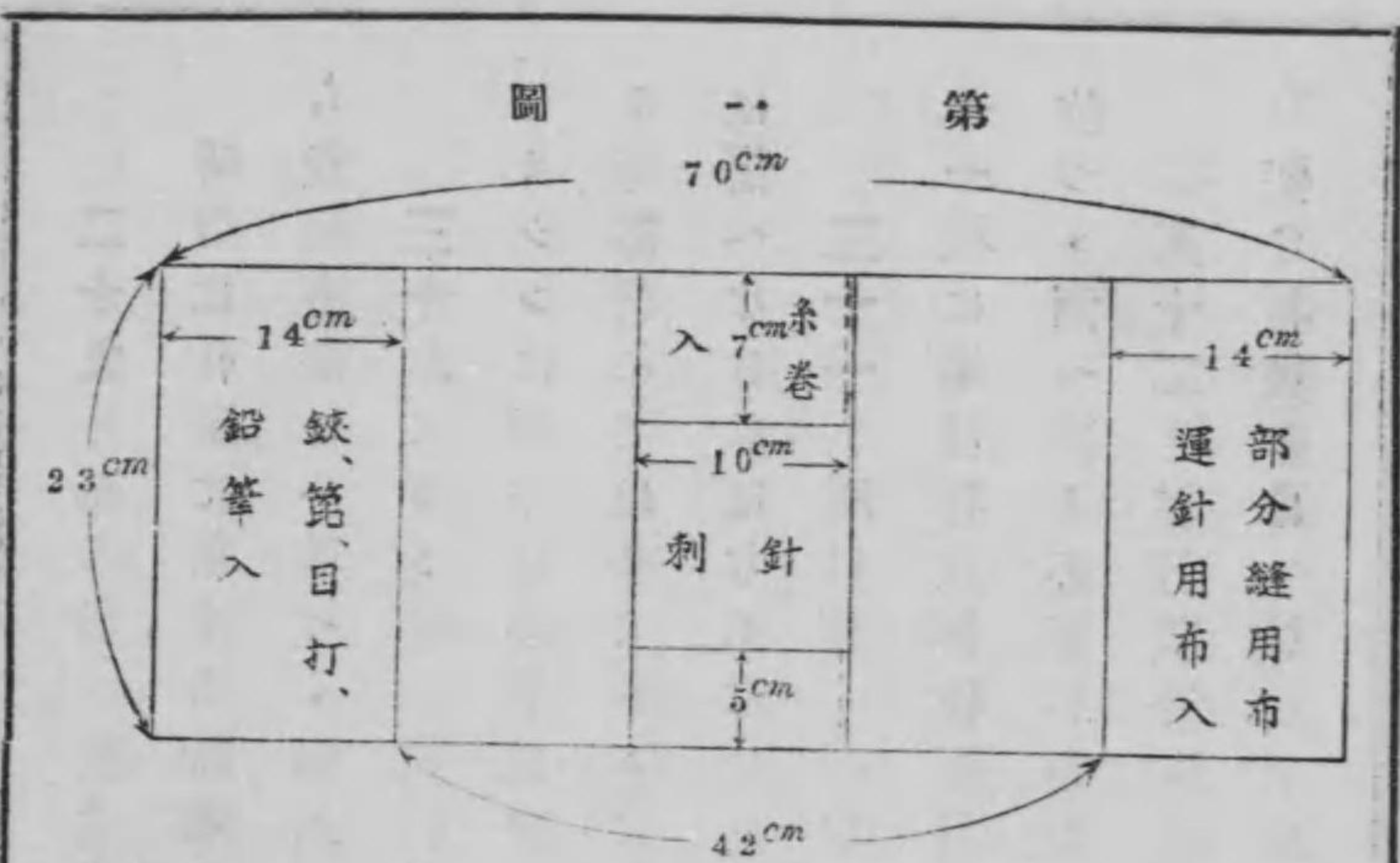
ミシンは現今は小學校でも使用させるから十臺位は備へる必要がある(尋常科にては手ミシンにてもよろし)中等學校にては少くとも二十臺は備へなければならぬ。

三十一 鳩目打 平目打

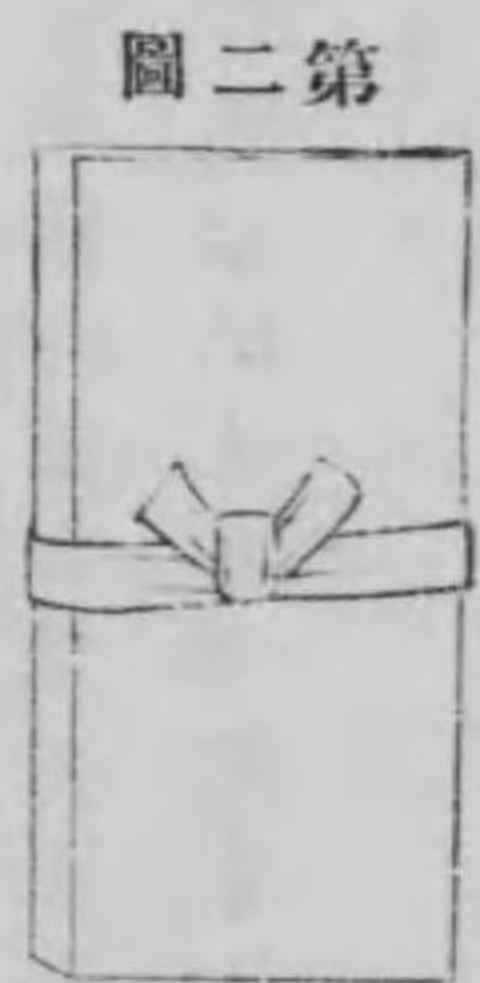
一校に鳩目打五個位、平目打幅九糎、一糎半、二糎四糎位の大中小各五個位づゝ備へ置く必要がある。

三十二 槌打貫臺

槌打貫臺は一校に五組位は備へ置く必要がある。



**三十三 針箱**  
 針箱は長十糎幅十二糎高六糎位の小箱にて懸子あるものがよい而して運針用布部分縫用布迄も入る、よう用意させる。



**第二圖**  
 第一圖の如く區劃して裏地を附け、内部四十二糎の區劃にボール紙の心を入れる、中央部の區劃に針刺糸巻入を作り、左右十四糎の區劃を内方に折返して袋を作り、用布用具等を便である、

其製法は横七十糎、縦二十三糎の布帛を

入れる出来上り四十二糎の兩側は共切を以て縁を取りおく、  
 使用済みとなれば第二圖の如く疊み長さ六十糎程の緒にて結び携帶に便にする。

**三十四 針刺**

針刺は針のさびぬよう中に片栗粉或は葛粉を入れ晒木綿にて五糎に八糎位の形に縫ひ尙之れに同形の被ひをかける、その大きさは針箱の懸子の或部と同じにする。

**三十五 針**

縫針二本、新針二本、待針十本位を木綿、紬又は絹針にて備へる。

**三十六 鋏**

布帛の裁断には羅紗切鋏全長二十糎か二十二糎のもの、糸切鋏十糎位のもの握鋏を備へる。

三十七 篋

長十三糎位の薄からず厚からぬ角篋を備へる。

三十八 指貫

指貫は紙の心に眞綿を捲きかゝつたのか、皮製のものを備へる。

三十九 鉛筆

二色以上の色鉛筆を用意するがよい。

四十 目打

教室に一本備へ置く。

以上の中(三十三)より(四十)迄の品は教師用として必要であるが兒童生徒にも同様に用意させる。

裁縫教授法終

大正十四年十月廿二日印刷  
大正十四年十月廿五日發行

「定價金貳圓」

著者 高橋イネ

發行者 三上源次郎

印刷者 村田豊吉

印刷所 株式會社 大倉印刷所

東京市京橋區新榮町五丁目七番地

裁縫教授法



發行所

東京市本郷區  
眞砂町十五區

文書

振替 東京六三二  
名古屋一〇五



# 裁縫筆記録

東京女子高等師範學校助教授兼教諭  
高橋イネ子女史編

菊判 全一冊  
定價金四拾八錢 送料金六錢

## “音福の界授教縫裁”

裁縫

教授の統一  
成績の増進  
教授上の便

は本冊子の負ふ所

著者は裁縫教授の權威として多年の眞摯な研究と算き體驗により裁縫教授改善の第一歩として本冊子を考案されました。本冊子の裁縫教授及び習練の上に絶大なる効果あるは全國有數女學校の教授成績と加速度を以て激増せる需要數が良く之れを證明して居ります。直に一本を備へて御試用あらん事切望致します。

紙質 上厚紙ベン

鉛筆書キ何レモ可

製本 優美堅牢ニシ

テ耐久保存宜

價格 ノート代用ニ

付キ最低廉提供

# 家事經濟學

家庭生活の經濟的研究

東京女子高等師範學校講師 松平友子著

本邦家事經濟學の矢の書

我々の經濟生活を合理的ならしめることは小にしては一家のため、大にしては我國全體のため極めて大切であることは云ふ迄でもない。本書は消費經濟を掌つて居る婦人として家庭の經濟的幸福を増進せんがためには是非とも知つて置かねばならぬ經濟上の智識を女學生たりとも之を通讀すればよく會得することの出来る程に通俗的に表明されたものである。最新の學說を基礎として始終理論と實際問題との接觸を保ち眞に生ける家庭生活の解釋を與ふると共に、又良き指導者たらんと試みたものであつて、女子教育家、家庭の經濟生活を掌る婦人は勿論、新時代の女學生の必讀研究書である。

(最新刊)

### 要 概 次 目

上 卷	下 卷
第一篇總論 第一章經濟學の基礎概念 第二章經濟學 第三章家族經濟並に家事經濟學 第四章現代に於ける經濟組織の基礎 第五章現代に於ける經濟組織の特徵 第二篇收入論 第一章所得 第二章財產所得 第三章勤勞所得 第四章職業及び社會階級 第五章收入の内容 第三篇支出論 第一章支出の概念 第二章支出の收入との關係 第三章支出と物價狀態との關係 第四章支出の對象及び消費の進歩	第四篇會計論 第一章家事會計の概念 第二章豫算 第三章出納(豫算實行) 第四章決算 第五章家計簿記 第五篇貯蓄論 第一章貯蓄の概念及び其要件 第二章預金制度 第三章有價證券 第四章其他の貯蓄機關 第五章保險制度

全二冊 四六判千二百頁  
クロース製裝幀優美國入  
上卷 定價金四圓  
下卷 定價金參圓六拾錢  
書留送料各金貳拾四錢

# 新 刊 書

國定書方半峯 山口彦總編書  
手本筆者  
書方 **基本點畫筆法掛圖**

柳涯 佐藤隆一編書並畫  
趣味と實用とを兼ねたる  
ペン習字とペン畫

柳涯 佐藤隆一編書  
**模範ペン習字**

東京女高師 佐伯常磨 大久保龍編  
秀逸 綴方 **私達の心**

高橋イネ子女史著  
東京女子高等師範學校講師  
松平友子女史著

全定小 製裝 丈二尺五寸幅一尺七寸 每一葉仕立ナレバ一輯ニテ數教  
一上價包 室ノ所便ニ用紙 最上等模造二百五十斤厚ナレバ破切ノ憂  
二紙四金 ナシ 印刷 其筆姿勢圖七色石版刷鮮明 點畫筆法墨色石版  
三製圖金 厚刷點畫標示大キサ五六間離レテ一目瞭然 本掛圖は山口先生  
四耐五廿 方自己の運筆々法を最も簡明適確に表明したる現行小學校書キ  
五耐七廿 許さず 特に執筆姿勢圖のみの需に應ず一葉定價金五拾錢  
六上價送 △ペン字の特質と實用  
七紙金料 △ペン畫の實用と美の融合  
八刷圖金 △ペン畫の藝術的趣味  
九鮮六六 △ペン字の藝術的趣味  
十明錢錢 △ペン字ペン畫の共同表現  
折印定送 從來ペン習字の手本は澤山ありますが眞の書家の手になつたも  
手刷價料 のは殆んど無く純粹的文字美を失ひ書としての價値が何處に在  
本刷金 にか疑はしきものばかりで學習者をしてやゝもすれば無味乾燥  
全金 になりしるべきが有りました。著者は毛筆書家として一家を成  
一鮮六六 がありす。本書は皆様に眞のペン字を紹介し併せてペン習字  
冊明圖錢 練習の指針を示した著者最近の力作であります。

全四定送 綴方は小學課程中最も至難なもの一つであります。著者は多  
六價料 年實際教育に従ひ幾多研究の結果集めた兒童の良文の中から尋  
一判金 當四五年生から高等小學生に最も適した一番秀れたもののみを  
美八金 選び懇切な批評を下し又名士の文章のいくさりや作文の心得等  
八拾六 を附して兒童の綴方實力を助成せんがため本書を公にしました  
冊本錢 無邪氣な愛しき文章然も夫れは一讀直に幼き人々に願望出来る  
本書を愛見のため又數へ子のため切にお勧め致します。

洋服新裁縫 近刊

家事經濟要綱 近刊



263.3  
220

終

